

媚

(びやく)

薬

勝
目
梓

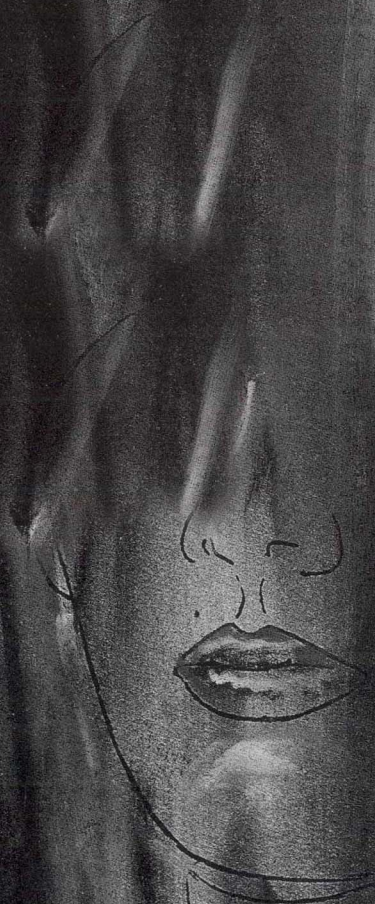


講談社

葉

勝目梓

講談社



媚（びやく）薬

定価一三〇〇円（本体一二六二円）

第一刷発行 一九九一年八月二六日

著者 勝目 梓

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社 講談社

〒112 東京都文京区音羽二―一二―二一

出版部 ○三―五三九五―三五〇五

電話 販売部 ○三―五三九五―三六二二

製作部 ○三―五三九五―三六一五



印刷所 株式会社廣済堂

製本所 株式会社黒岩大光堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り換えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。

目次

燭台そくだい

5

義齒

27

切株

47

負い目

75

白い壁の部屋

101

髪

127

香水

147

媚薬ひやく

173

三 嶋 典 東・装 画
TEN NET WORX・デザイン

媚
(びやく)
薬

燭しよく
台だい

ドアを開けると、カウンターのの中から、ママが眼を投げてきた。

ママの顔に、曖昧な翳がひろがった。店は込んでいたが、空いた席がないわけではなかった。浅野は、どうしたの、と眼でママに問いかけた。

ママの視線が、長いカウンターの奥の端にずっと流れていった。そこに昭子の姿があった。

浅野はママの困惑を理解した。昭子は六年前まで、浅野の妻だった女である。別れてからは、一度も顔を合わせていない。

浅野のほうが、強引に押し切った形の離婚だった。会えば怯む気持が、浅野にはある。昭子は、まだ、浅野が入ってきたことに気づいていない。連れがあるようすだ。このまま消えちまおうか、と浅野は考えた。

ママが浅野に視線を戻した。眼が合った。

へまずいんじゃないの？

ママの眼が言っていた。それが浅野に虚勢を張らせた。

へ平気、平気。親の仇ってわけじゃないんだから……

胸の中でママに言って、浅野はドアの近くのカウンターの席に着いた。昭子の席とは、止り木

で七つほど離れている。間は客で埋まっていた。

浅野はたばこを出しながら、昭子のほうに眼をやった。客たちの肩越しに、昭子の笑った横顔が見えた。六年前と比較すると、頬が丸くなったように見える。記憶にある彼女の頬の雀斑は、ここからは見えない。

小さな笑い声があがった。昭子も肩をゆすって笑っていた。連れは二人だった。一人は女だった。

ママが、酒の棚から、浅野のウイスキーのボトルをおろした。昭子がそれを見ていた。ボトルのラベルの上には、浅野の名前が大きく書かれていた。

ママはボトルを両手で持って、浅野の前にやってきた。昭子がカウンターの上に首をさしのべて、探るような眼を浅野に向けてきた。浅野は昭子に会釈を送った。表情が硬いのは、自分でもわかっていた。昭子は、連れとの笑いの残ったままの顔で、小さく頷き返してきた。平静なようすだった。

ママはボトルを持ったまま、気まずそうな笑いを見せて、浅野と昭子を交互に見やった。浅野はくわえたままにしていたたばこに、火をつけた。昭子は、連れとのやりとりの中に戻っていた。

「水割りでいいのね？」

「濃いめのやつね。気を遣わしちゃったな、ママ」

「何年になる？ 別れてから」

「六年かな」

「それじゃあね。会ったからって、いまさはどうってこともないか。ずっと会ってなかったんでしょう？」

「一度も。まさかママとここで鉢合はちあわせするとは思わなかったな。よく来てるわけじゃないんだろう？ 敵は……」

「敵はよしなさいよ。浅野さんが敵って言うことはないわよ」

ママは小声で言って、浅野を軽く睨にらんだ。浅野は笑って、天井に顔を向け、たばこの煙を吐いた。

「六年間、一度も昭子さんは見えなかったわ。今夜は偶然よ。お連れさんに誘われたんだって」

「連れのほうは、よく来る人？」

「新しい常連さんでとこね。建築関係の雑誌社の方なの」

「女の人のほうも？」

「そうみたいよ。気になる？ 昭子さんの連れのこと」

「まさか。おれ、そんな顔してる？」

「浅野さん、材木屋だから」

「材木屋？」

「そう。木が多い。気が多い」

「おもしろいねえ。笑ってあげましょう」

ママはいつもの顔になって、浅野の前から離れた。水割りは十分に濃いめだった。浅野は灰皿でたばこを消しながら、昭子のほうに眼をやった。待ち受けていたような昭子の眼が、そこにあ

った。昭子も灰皿でたばこを揉み消していたところだった。眼が合うと、昭子のかすかにほほえんだ。浅野も釣られたように、表情をゆるめた。

昭子がたばこを吸うところを見てみたい。浅野は、ふっとそう思った。昔は昭子はたばこは吸っていないかった。

新しい客が、四人連れで入ってきた。

四人が一緒に坐れる席はなかった。カウンターの他には、うしろの壁ぎわにテーブルが一つだけ、という小さな店なのだ。

すぐに、昭子たちが帰る支度をはじめた。浅野は二杯目の水割りにとりかかっていた。

昭子たち三人が、ドアに向ってやってきた。浅野はいくらか構える気持になった。昭子とことばを交さずにいるわけにはいかないだろう。

「ごめんなさい。あたし、ちょっと残るわ」

昭子は、浅野のうしろで足を止めて、連れの二人に声をかけた。

「そう。じゃあ、お先に……」

連れの二人は、意外な顔もせずと言って、短い視線を浅野に向けた。浅野は無視した。連れの二人は、浅野が昭子の知合いであることを聞かされていたようだった。女のほうが、ドアのところで昭子に手を振った。昭子も浅野の頭のうしろあたりで、ひらひらと手を振って応えた。そのようすが、浅野の正面の酒の棚の扉のガラスに、ぼんやりと映っていた。

浅野の隣の止り木は空いていた。昭子はカウンターにバッグを置き、両手でスカートの裾を押

えて、止り木に腰をおろした。

「しばらく……」

バッグを膝の上に置いて、昭子が言った。

「元氣そうじゃないの。飲む？」

浅野は昭子のほうに顔を向けた。薄い化粧の下に、頬の雀斑が見えた。

「ただこうかな」

「水割りでもいいの？」

「お酒、強くなったのよ。何でも飲めちゃうの」

昭子は笑って言って、バッグからたばこの袋と使い捨てのライターを出し、カウンスターに置いた。浅野は前の白い布の上に伏せて並べてあるグラスを勝手に取り、氷をつまんで入れた。昭子はライターをつけた。

酒が強くなった、と言った昭子のことだが、浅野の中に残っている。酒が強くなったのは、あなたのせいよ、と言われている気がしてならなかった。昔も昭子は酒を飲んでいた。それは浅野の相手で飲む、といった程度だった。

こしらえた水割りを、浅野は黙って昭子の前に置いた。ママは意識してか、離れたところで他の客の相手をしていて、寄ってこない。

「ありがとう」

昭子がグラスを取って小さく宙に浮かせた。グラスはそのままそこに留まっている。乾杯の催促か、と浅野は思ったが、気づかぬふりをした。昭子はわずかに首を突き出すようにして、グラ

スに口をつけた。

「変らないわね、あなた」

「腹が少し出てきたよ」

「あ、ラクしてるんだ。三十五でお腹が出るのは、ちょっと早いと思うな」

「ラクなんかしちゃいけないけどね」

「あたし、変ったでしょう？」

「少し痩せたのか？」

「体重は変わらないの。そんなことじゃなくて、貫禄ついたと思わない？」

「酒は強くなつたし、たばこも吸うようになったからな」

昭子は、前を向いたまま、含み笑いを洩らした。何を考えているのかわからない、といった女に見えた。そういうところは、たしかに以前の昭子ではなかった。それはしかし、昭子の言う貫禄というようなものとは、別のことに、浅野には思える。手強い女になったように見えるな——
そういうことだが、浅野の喉元でせき止められた。

「よく飲んでるのかい？ お酒」

「週に一日だけ。飲まない日がね」

「すごいね」

「なんとなく、飲む友だちばかりが増えていくの。不思議ね。お酒でおつきあいが始まるわけじゃないんだけど」

「さっきの二人も飲み友だち？」

「みたいなものね。はじめはお仕事で知合ったんだけど」

「仕事、忙しい？」

「ここんところ、そうでもないの。いま必死でワープロの練習してるの。そのうちに、速記もワープロ叩いて取る時代になると思うの。速記という仕事、いずれはなくなるんじゃないかしら。音声を活字にってしまうワープロだって、いずれ普及するでしょうし」

「だけど、先の話だよ、それは……」

「そうでもないわ。見えてる先だもの。心細い話……」

ことばほどには、昭子は深刻なようすではない。

「ごめんなさい。つまらない話になっちゃった。あたしね、実は今夜、期待してたんだ」

昭子は小声で言って笑った。浅野に向けた彼女の眼の奥に、細い光が揺れていた。そこで顔を合わせてから、昭子が始めて見せた、生々しい表情だった。

「何を期待してたんだい？」

浅野は、昭子から眼を逸^そらして、グラスに手をのばした。

「誘われてここに来たんだけど、ひょっとしたら、浅野サンが現われるかもって思ったの。棚に浅野って書いたボトルがあったし、ママに訊^きいたら、あいかわらずよく来てるって言うから」

「うさぎで飲もうって誘われたとき、ヤバイって思わなかった？」

「思った。思ったけど、別れた亭主の馴染みの店だから、うさぎはいやとは言えないでしょう」

「怖い偶^ふ然^{ぜん}てやつだ」

「怖いと思ったの？ 浅野サンとしては」

「ハッキリ言って、逃げようと思った」

「そうかもね。それ当ってる。あたしは、意地のわるい気持で、浅野サンの現われるの期待してたんだもの」

「あんまりいじめないでくれよ。でも、さっき、最初に顔が合ったときは、意地のわるい感じには見えなかったのに……」

「ばかね。冗談よ。あたし、いま三十四よ。浅野サンと別れたのが二十八のとき。女の二十八から三十過ぎまでって、忙しいのよ。いろいろとね。ほんと、忙しい。いつまでも浅野サンのこと恨んで泣いてる暇なんかなかったの」

昭子は冗談めかした笑いを見せていた。いろいろと男のことで忙しかったわけだ、と言いかけて、浅野はそのことを酒と一緒に呑みこんだ。

離婚後の昭子の暮しぶりについては、浅野は何も知らない。同じ東京に住んでいても、消息は伝わってはこなかった。昭子に新しい相手ができて、落着いた日々を送っていればいいが、という気持が、ときに浅野の胸に湧いて出るときもあったのだ。

だが、思いがけなく顔を合わせたいま、そうしたことを昭子にたずねるのは、やはり浅野には気のひけることなのだ。自分で谷から相手を突き落しておいて、どうだい、無事かね、と声をかけるようなものだ。

「万里子ちゃんて言ったっけ。大きくなったでしょう」

「うん」

昭子は、浅野の娘のことを言っている。万里子は、浅野が昭子と別れる原因となった女との間

に生れた子供だった。

「どう？ うまくいってる？」

「なにが？」

「なにがって、きまつてるじゃない。浅野サンは、よき夫であり、よきパパであろうとして、まじめにおとなしく暮してますかって訊いてるの」

「きみにそういうことを訊かれると、やっぱり棘とげを感じるな」

「棘なんかないわよ。あたしはフランク」

昭子は真顔で言った。ママがやってきて、灰皿をとりかえた。

「安心した。血の雨かと思っただけ」

ママはカウンターごしに身を乗り出してきて、浅野と昭子を交互に見ながら、笑った。

「いびられてるんだよ、ママ」

「今夜は特別にお酒、おいしいでしょう、昭子さん」

「そらそうだよな。酒の肴さかなが いいもの」

「そうね。別れた亭主いびりながらの酒が、こんなにおいしいとはしらなかったわ」

昭子が言って、三人は笑い出した。

「でも、いじけないでね、浅野サン」

「酒の味が落ちるってんだろう。わかってますよ。どうせおれは酒の肴だよ。しかし、それにしても、きみは酒もたばこも、ほんとにうまそうに飲むねえ」

「変るのよ、女は。ねえ、ママ……」